佐久市埋蔵文化財調査報告書 第7集

SANKAN

三　貫　畑

長野県佐久市大字長土呂三貫畑遺跡発掘調査報告書

1992.3

佐久市教育委員会

佐久埋蔵文化財調査センター

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第7集

SANKANBATAKE

三　貫　畑

長野県佐久市大字長土呂三貫畑遺跡発掘調査報告書

1992.3

佐久市教育委員会

佐久埋蔵文化財調査センター

例　　言

1　本書は、平成２年度佐久市土木課が行う市道８－１号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2　調査委託者　　佐久市（土木課）

3　調査受託者　　佐久市教育委員会

4　発掘調査所在地籍及び面積

西近津遺跡群三貫畑遺跡（ＮＮＴ）　佐久市大字長土呂字三貫畑1919－１他　　1,225 ㎡

5　調査期間

平成２年10月９日～10月23日・10月22日～平成３年３月29日

6　事務局及び調査団の構成

（事務局）　佐久市教育委員会埋蔵文化財課・佐久埋蔵文化財調査センター

教　育　長	大井季夫	教育　次長	小池八郎
開発公社局長	須江吉介	課長兼所長	相澤幸男

管　理　係　　桜井牧子（係長）・東城公人・田島清巳（嘱託）・関口美咲（臨職）

埋蔵文化財係　　相澤幸男（係長兼務）・高村博文・林幸彦・三石宗一・須藤隆司・小山岳夫・小林眞寿・羽毛田卓也・翠川泰弘・竹原学・助川朋広

（調査団）

団　　長	黒岩忠男（佐久考古学会副会長）
副　団　長	藤沢平治（佐久市文化財審議委員）
調査担当者	高村博文
調査補助員	香山優子
協　力　者	井上貴美子・小林永一・柳沢時枝

7　本書の編集は高村博文・香山優子が、執筆はすべて高村が行った。

8　本書及び出土遺物等の全資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

目　　次

例言・目次
第Ⅰ章　発掘調査の経緯……1
　第1節　発掘調査に至る動機……1
　第2節　調査日誌……2
第Ⅱ章　遺跡の環境と基本土層……2
　第1節　遺跡の環境……2
　第2節　基本土層……4
第Ⅲ章　遺構と遺物……9
　第1節　検出遺構・遺物の概要……9
　第2節　竪穴住居址……9
　　1)　H1号住居址……9
　　2)　H2号住居址……9
　　3)　H3号住居址……10
　　4)　H4号住居址……10
第Ⅳ章　小　　結……14
引用参考文献
写真図版

挿図目次

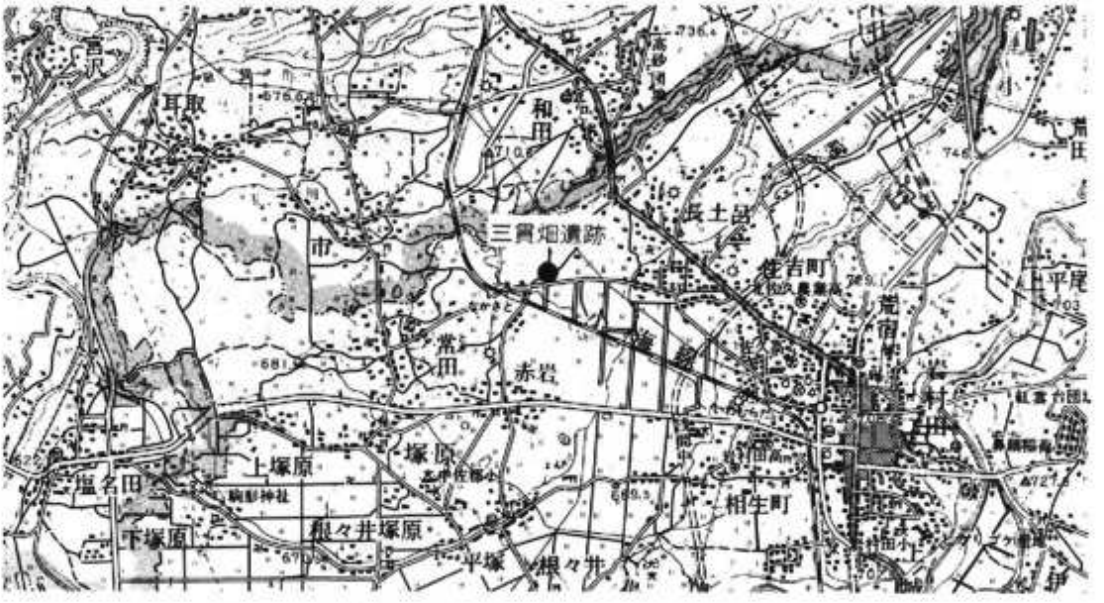
第1図　三貫畑遺跡の位置……1
第2図　周辺遺跡分布図及び発掘区設定図……3
第3図　基本土層模式図……5
第4図　トレンチ設定図……6
第5図　三貫畑遺跡遺構全体図……7
第6図　H1号住居址実測図……10
第7図　H2号住居址実測図……11
第8図　H2号住居址出土土器実測図……11
第9図　H3号住居址実測図……12
第10図　H4号住居址実測図……12
第11図　H3号住居址出土土器実測図……12
第12図　H3号住居址出土鉄製品実測図……12

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査に至る動機

三貫畑遺跡は、佐久市長土呂地籍に所在し、御代田方面から南西に放射状に伸びる田切り地形の終末部分で、東方の周防畑遺跡群、西方の西近津遺跡群に挟まれた小田切り地形に存在し、西近津遺跡群の東側縁辺に含まれると考えられ、標高は700～704ｍ前後を測る。周防畑遺跡群・西近津遺跡群は『佐久市遺跡詳細分布調査報告書』によると、いずれも縄文時代から平安時代の複合遺跡であり、昭和46年度西近津遺跡、昭和54年度周防畑Ａ遺跡、昭和55年度周防畑Ｂ遺跡、昭和58年度若宮遺跡等の発掘調査が実施され、弥生時代から平安時代の遺構が多数検出された。また、昭和63年度には、今回の道路の東部分の道路改良にともない森下遺跡の調査が実施されており、弥生時代から平安時代の住居址20棟が検出されている。

今回、佐久市土木課が行う市道８－１号線道路改良工事に伴い、遺跡の破壊が余儀なくされる事態となり、拡幅工事に先立ち発掘調査を行い、記録保存する必要が生じた。



第１図　三貫畑遺跡の位置（１：50,000）

第２節　調査日誌

平成２年10月９日（火）　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ地区にトレンチを入れる。Ｃ地区より１棟、Ｄ地区より３棟の住居址が検出される。

10月11日（木）～10月23日（火）

遺構の掘り下げ・精査、実測、写真撮影作業を行い、テント・機材の撤収をし、道路の埋め戻しを実施して現場作業を終了する。

10月22日（月）～平成３年３月29日（金）

室内において報告書作成作業を行い全調査を完了する。

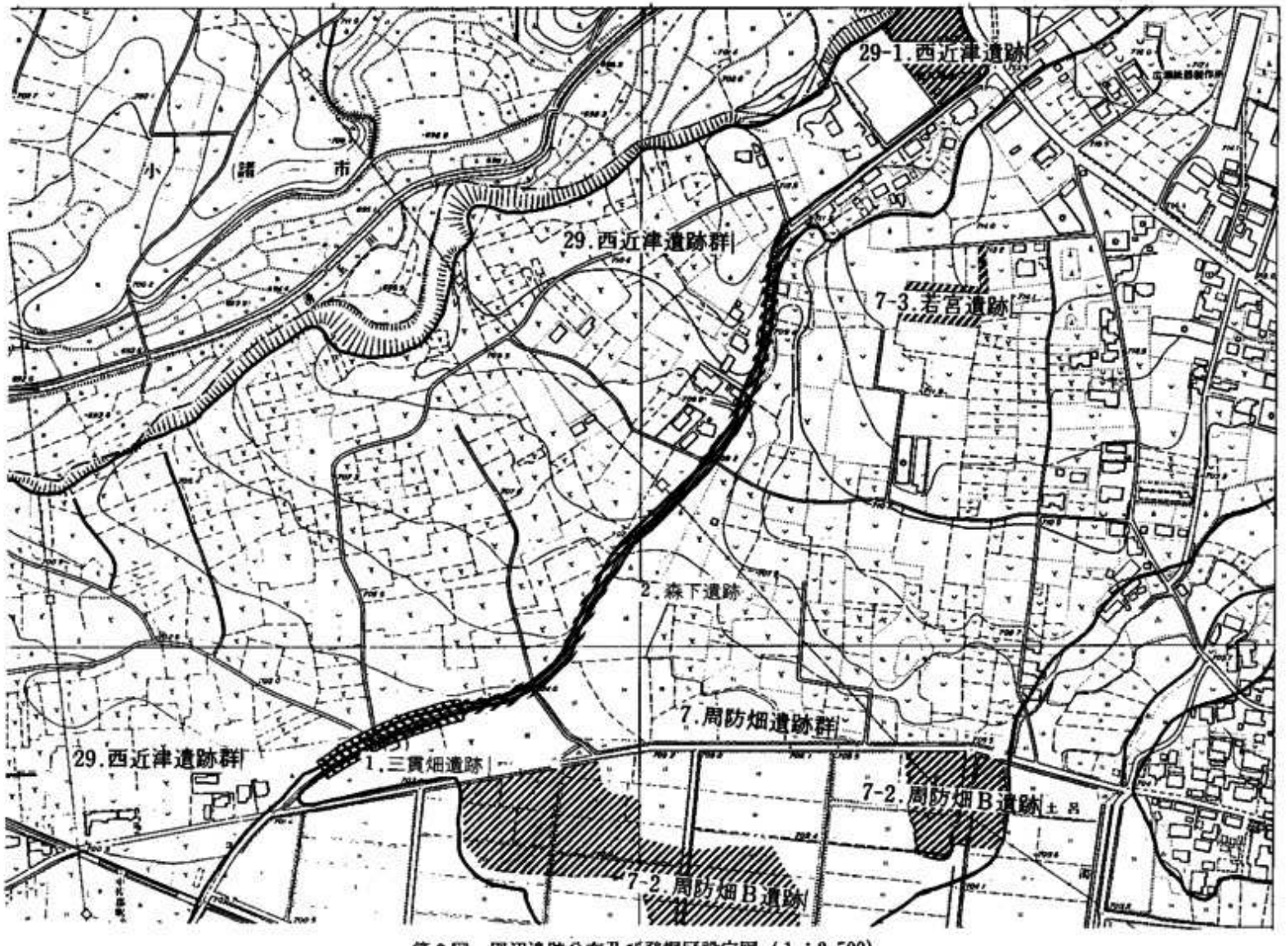
第Ⅱ章　遺跡の環境と基本土層

第１節　遺跡の環境

三貫畑遺跡は佐久市北部に存在する。佐久市北部とは行政区画でいう岩村田・長土呂・小田井・西屋敷・塚原・常田・平塚・根々井・大和田地籍で、いわゆる湯川の右岸地域をいう。佐久市北部は、約23,000年前の黒斑山の水蒸気爆発（塚原泥流）により形成された「流れ山」がみられる岩村田の西方、中佐都地区を除くと大部分が約13,600年前の第二次外輪山前掛火山の長期にわたる火山活動により形成された第１軽石流（Ｐ１）の堆積層地域である。

三貫畑遺跡が存在する地域は、この第１軽石流（Ｐ１）が厚く覆った地帯に属し、この新しい火山灰・砂礫は未分解凝結不充分な地層で、水蝕抵抗力が極めて弱く、この地帯一帯には火山山麓特有な流水の浸食による大小の「田切り」地形の発達が目ざましく、浅間山頂を中心に山麓地形に応じて南西方向へ放射状に幾筋も分布している。この田切り台地上に佐久市でも有数な遺跡群が密集している。主な遺跡群を東からみると、栗毛坂遺跡群・枇杷坂遺跡群・長土呂遺跡群・芝宮遺跡群・周防畑遺跡群・近津遺跡群・西近津遺跡群と連なっており、三貫畑遺跡は佐久市と小諸市の境界に当たる西近津遺跡群内に含まれている。

これらの地域の遺跡群内の発掘調査は、昭和46年西近津遺跡を最初に、昭和47年～59年までに佐久市教育委員会によって幾多の遺跡の調査が行われ、昭和60年から現在に到っては、高速道路建設、新幹線建設及び関連事業に伴い発掘調査が大規模化し、佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化



第2図　周辺遺跡分布及び発掘区設定図（1：2,500）

第1表　周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	立地	時代						備考
				縄	弥	古	奈	平	中	
1	三貫畑遺跡	長土呂字三貫畑	田切り台地		○	○	○	○		本調査
2	森下遺跡	長土呂字森下・若宮他	〃		○	○	○	○		昭和63年度発掘調査
7	周防畑遺跡群	長土呂字周防畑・上北原他	〃	○	○	○	○	○		
7－2	周防畑B遺跡	長土呂字大豆田・下仲田他	微高地		○	○	○	○		昭和55年度発掘調査
7－3	若宮遺跡	長土呂字若宮	田切り台地			○	○	○		昭和58年度発掘調査
29	西近津遺跡群	長土呂字西近津・下大豆塚他	〃	○	○	○	○	○		
29－1	西近津遺跡	長土呂字西近津	〃		○	○				昭和46年度発掘調査

財調査センター・長野県埋蔵文化財センターの三者によって実施され、特に長土呂遺跡群聖原遺跡の発掘調査面積は約9万㎡に達し、古墳時代後期から平安時代の集落址の全貌が明らかにされつつある。

この地域に、人々が足を踏み入れた最初の痕跡は、現在のところ湯川右岸の低段丘面の栗毛坂遺跡F地区で、縄文時代早期末から前期（約6,000年前）の土坑・集石群が検出されている。弥生時代の集落址では琵琶坂遺跡V・西近津遺跡・森下遺跡・周防畑遺跡B等がみられ、特に上直路遺跡から出土した銅鈴は特筆される。古墳時代から平安時代の遺構は、前述した聖原遺跡を初め多数検出されており、その繁栄ぶりが窺える。このようなことから、佐久市北部、第1軽石流（P1）の堆積した地域は、特に弥生時代から現在まで居住地域として適した地帯であったと考えられ、三貫畑遺跡で検出された住居址もそれらの集落の一部であろうが、生産地域がまだ発見されておらず、今後の課題である。

〈引用参考文献〉

樋口和雄(1988)『十二遺跡』御代田町教育委員会

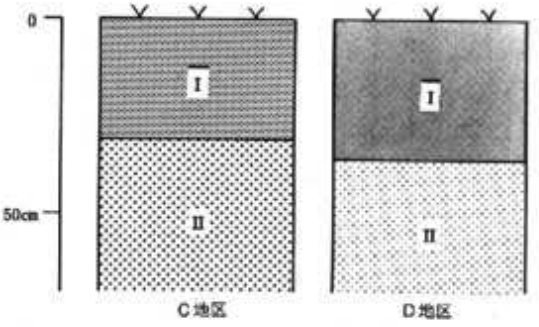
第2節　基本土層

本遺跡の発掘調査は、道路改良事業に伴う調査という性格から、東側から重機によりA・B・C・Dトレンチを入れて、まず遺構の確認から実施した。その結果、A・Bトレンチ内からは遺構は検出されず、黄色ローム層（P1）上まで掘り下げた所、脇の水路より水が湧き出してきた。Cトレンチ内より1棟の住居址が検出されたものの、南側から現道にかけて大規模な攪乱が入っており、住居址もその攪乱に南側が破壊されていた。Dトレンチ内よりは黄色ローム層（P1）直上より住居址が3棟検出されたが、西方に向かうにしたがって低地になっており、黒色土が堆

積していた。

Ｃトレンチ内の基本土層（第３図）は、Ｈ１号住居址北側の南面セクションの観察による。住居址はⅡ層のローム層を堀り込んで構築されていた。

Ｄトレンチの基本土層（第３図）は、Ｈ４号住居址北側の南面セクションの観察による。住居址は、Ｃトレンチと同様、Ⅱ層のローム層を堀り込んで構築されており、他の２住居址も同じローム層上面より検出された。また、Ｄトレンチ内には、現道下に沿って２本の排水溝が検出されたが、いずれも住居址を破壊して構築されており、道路工事の際、付設されたものと考えられる。



第３図　基本土層模式図

Ｃトレンチ基本土層

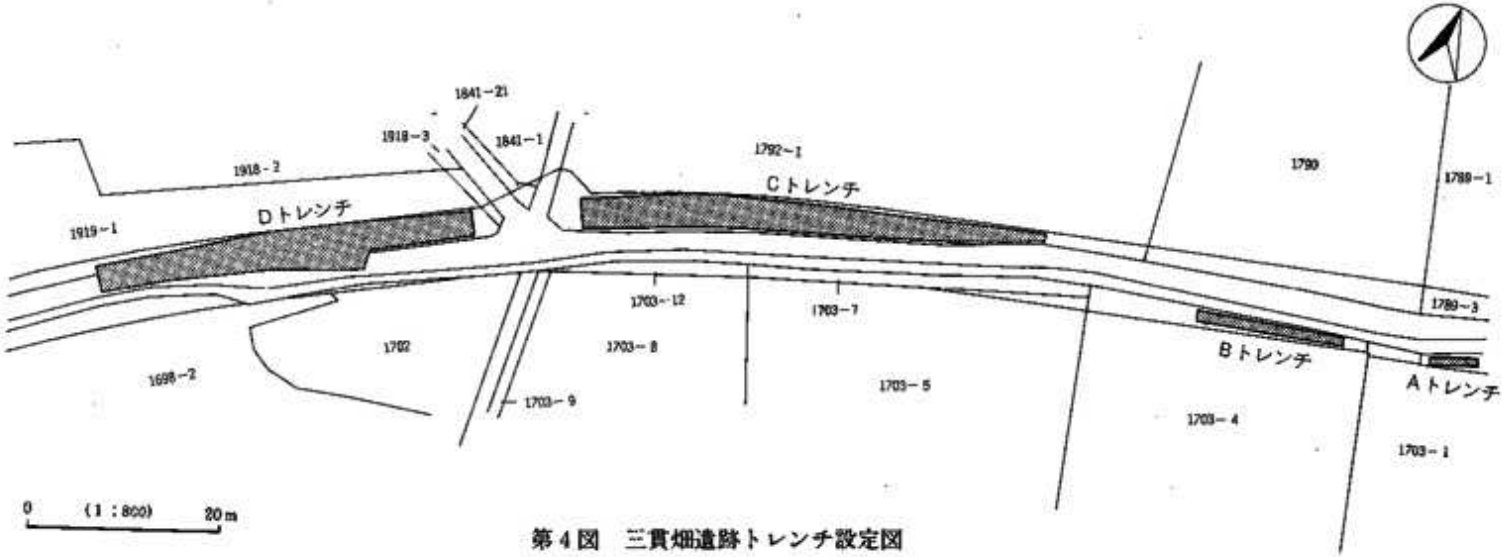
第Ⅰ層　褐色土層(10YR4/4)耕作土

第Ⅱ層　黄橙色土層(10YR8/6)ローム層

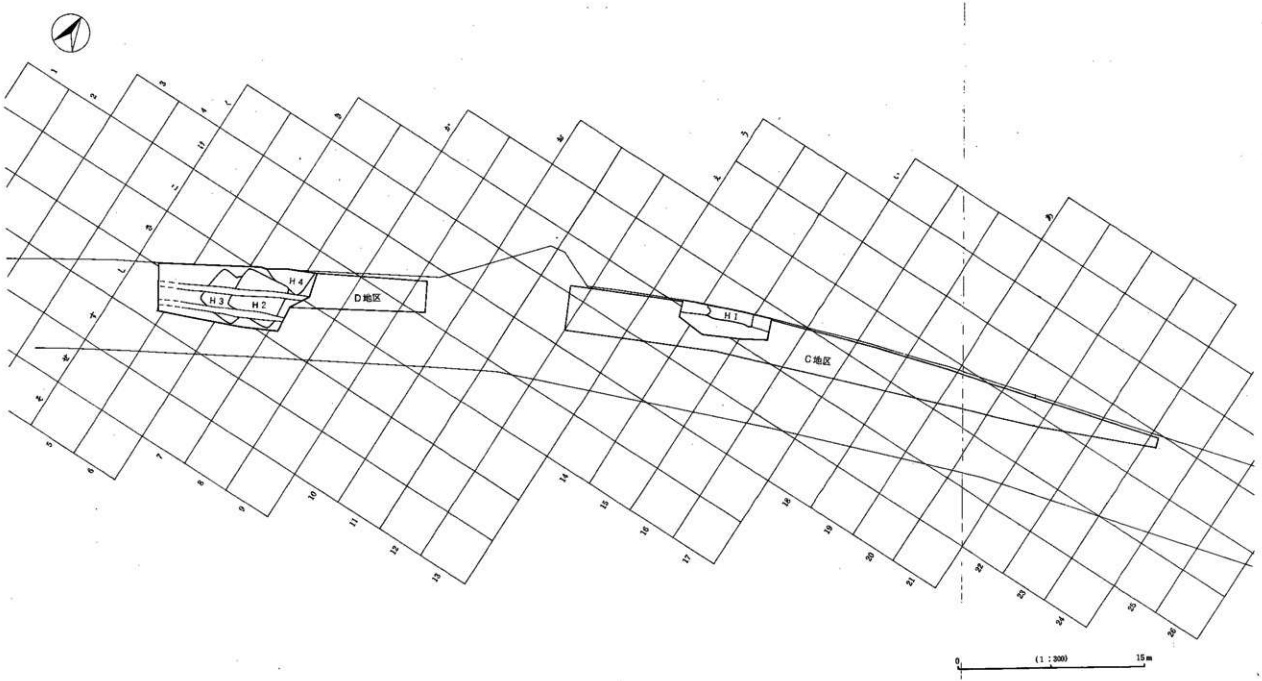
Ｄトレンチ基本土層

第Ⅰ層　灰黄褐色土層(10YR5/2)耕作土、下層に茶褐色の層が薄く堆積しており水田があったことを示す。

第Ⅱ層　黄橙色土層(7.5YR7/8)　ローム層



第4図　三貫畑遺跡トレンチ設定図



第５図　三貫畑遺跡遺構全体図

第Ⅲ章　遺構と遺物

第１節　検出遺構・遺物の概要

検出遺構

竪穴住居址　４棟　（弥生時代後期１棟、古墳時代後期～奈良時代１棟？、奈良時代１棟、奈良時代～平安時代初頭１棟）

出土遺物

土　器　縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器等

金属器　刀子

第２節　竪穴住居址

１）Ｈ１号住居址（第６図、図版三・四）

本住居址は、Ｃ地区北西寄りのか－15グリッド内より検出された。北側は調査区外となり、西、南側は攪乱により破壊されていて、東壁の一部が検出されたにすぎない。

遺物は、本住居址に共伴すると考えられるものは破片が少量で、須恵器坏片１、器肉の厚い武蔵甕調整に近い長胴甕片が出土している。混入遺物と考えられる土器として、縄文時代中期後半の浅鉢の把手？、弥生時代後期土器片が見られる。

２）Ｈ２号住居址（第７・８図、図版四・五・七）

本住居址は、Ｄ地区中央付近のさ－７グリッド内より検出された。Ｈ３・４号住居址と重複関係があり、土層観察から、Ｈ３・４号住居址を破壊して構築していることが明らかであった。また、現代の排水溝が２本東西方向に存在した。

北壁中央よりやや西寄りにカマドが検出されたが、破壊が著しかった。ピットは計６個検出できたが、主柱穴と考えられるものはみられなかった。床面は、カマド付近から中央に向かって固く貼きしめられていた。規模・形態等は第３表を参照願いたい。

遺物は、図示できたものに土師器５点、須恵器４点がある。混入遺物として弥生土器片が多数

みられる。長胴甕は武蔵甕で、土師器坏の底径も口径に比して大きい。８－５の坏は底部回転糸切り技法がみられる。土師器坏と須恵器坏の出土比率では、土師器坏が多くみられること、底部回転糸切り技法がみられることなどから、奈良時代後半～平安時代初頭の住居址の可能性が高い。

３）Ｈ３号住居址（第９・11・12図、図版五・六・七）

本住居址は、Ｈ２号住居址の西側で、さ・し－６・７グリッド内に位置している。Ｈ２号住と重複しており、Ｈ２号住居址に北壁・東壁の半分を破壊されていたものの、床面は全プラン検出された。Ｈ２号住居址と同様、現代の排水溝が東西に２本走って本址を破壊している。

カマドは、北壁中央付近に検出されたが、やはり破壊が著しい。ピットは２個検出されたものの主柱穴とはならない。規模・形態等は、第３表を参照願いたい。

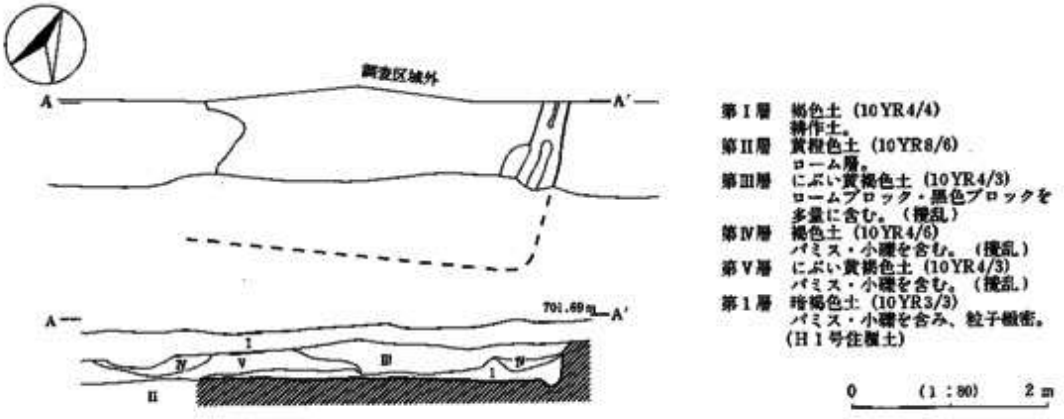
遺物で、図示できたものは須恵器蓋１点のみである。混入遺物として縄文土器片１点、弥生土器片が多数みられた。

本址に共伴するものと思われる土師器坏に回転糸切り技法がみられず、また、武蔵甕が存在することから、Ｈ２号住居址より古く、奈良時代の住居址の可能性が高い。

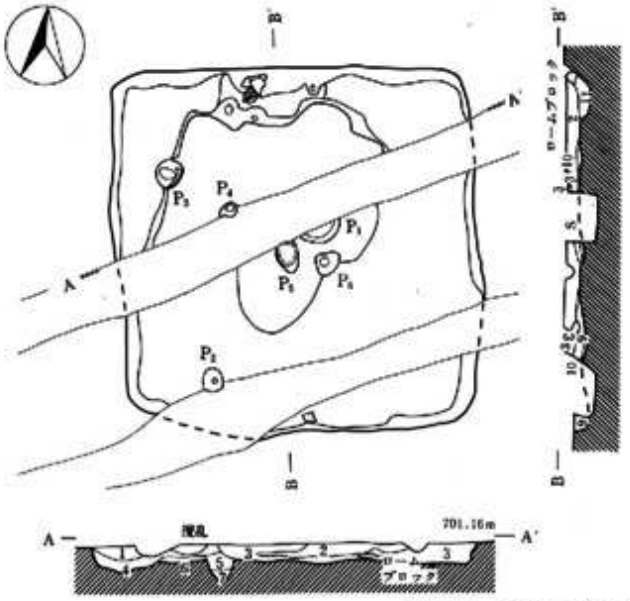
４）Ｈ４号住居址（第10図、図版六）

本住居址は、Ｈ２号住居址の北側、こ－７・８グリッド内に位置している。Ｈ２号住居址とわずかに重複関係にあり、Ｈ２号住居址に内壁の一部を破壊されている。北側は、調査区外になるため、全プランは検出されなかった。南壁と東壁の一部が検出されたが、弥生時代の住居址に特徴的な南側の主柱穴と、その中間の入口施設と考えられるピットが検出された。

遺物は、櫛描波状文の甕片と赤色塗彩の壺片が出土しており、弥生時代後期の所産と考えられる。混入遺物として須恵器片がみられる。



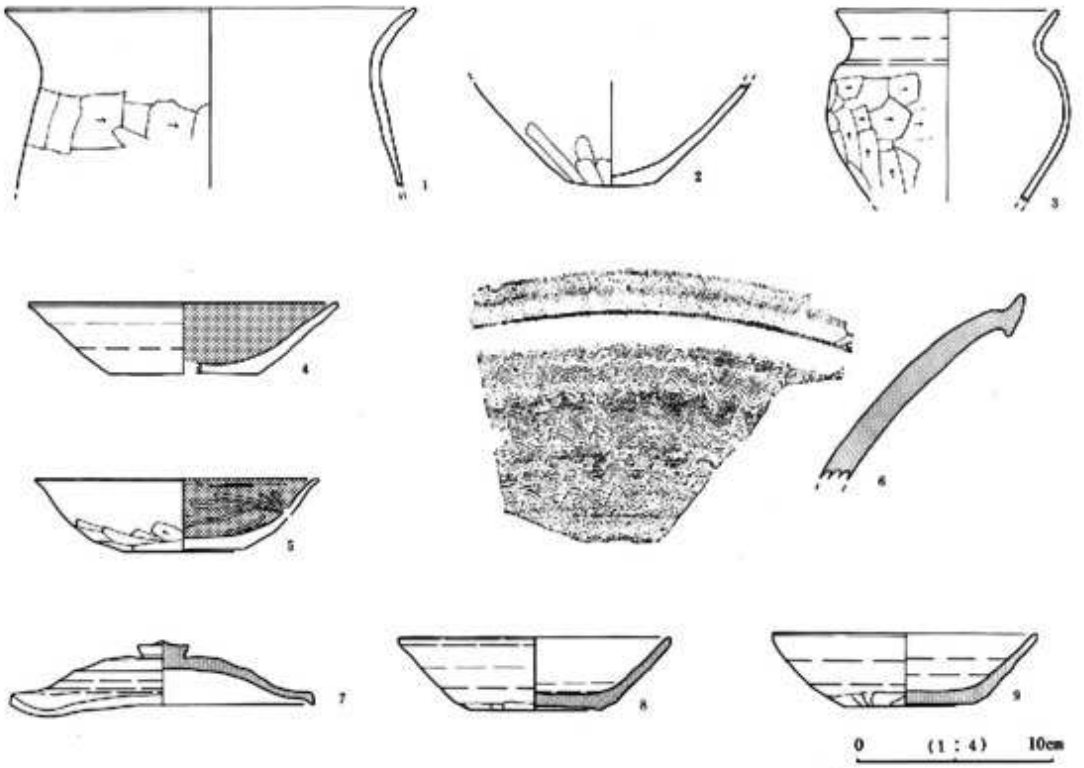
第６図　Ｈ１号住居址実測図



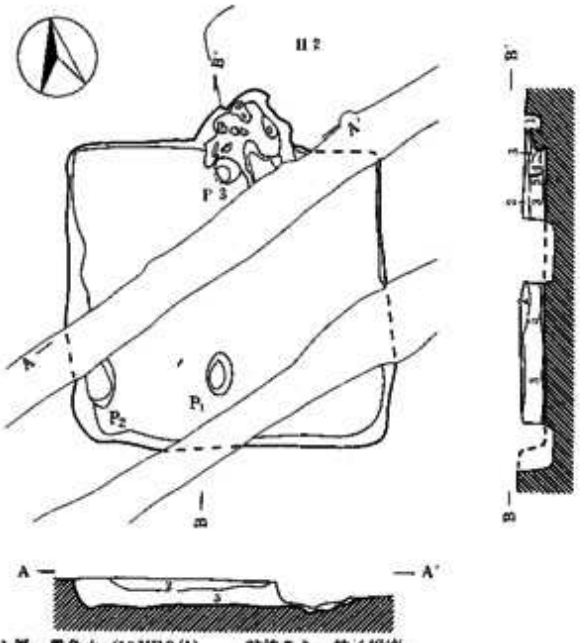
第1層　黒褐色土（10YR3/2）
パミス・ローム粒子・黒色粒子・赤褐色粒子を少量含む。
第2層　暗褐色土（10YR3/3）
パミス・ローム粒子・黒色粒子・赤褐色粒子を多量に含む。
第3層　黒褐色土（10YR2/2）
パミス・ローム粒子・黒色粒子・赤褐色粒子を含む。
第4層　黒色土（10YR2/1）
パミス・ローム粒子・黒色粒子・赤褐色粒子を含む。
第5層　暗褐色土（10YR3/3）
ローム層含有。
第6層　黒色土（10YR2/1）
ロームがブロック状に混る。
第7層　にぶい黄褐色土（10YR5/4）
粘質あり。
第8層　黒色土とローム層の混入土。
第9層　暗褐色土（10YR3/3）
混入物が少ない。
第10層　黒色土（10YR1.7/1）
炭化層。
第11層　黒色土（10YR1.7/1）
混入物が少ない。
第12層　黒色土（10YR1.7/ 1）
パミス・ローム粒子・赤褐色粒子を含む。
第13層　黄橙色土（10YR7/6）
ローム層。

0　（1：80）　2 m

第7図　H2号住居址実測図



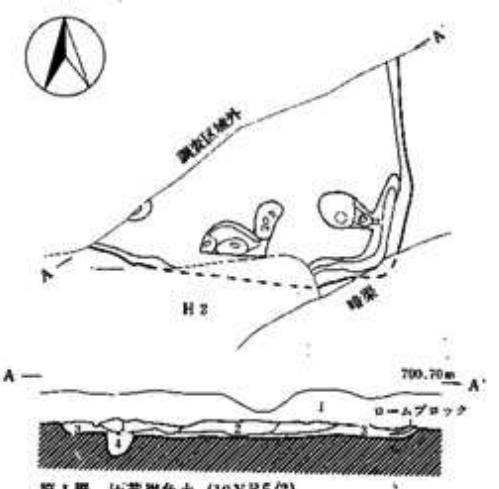
第8図　H2号住居址出土土器実測図



第1層　黒色土（10YR2/1）　粘性あり。粒子緻密。
第2層　黒褐色土（10YR3/2）　パミス・ローム粒子・黒色粒子・赤褐色粒子を少量含む。
第3層　黒色土（10YR1.7/1）　パミス・ローム粒子・赤褐色粒子を含む。
第4層　暗褐色土（10YR3/3）　パミス・ローム粒子を含む
第5層　黒色土（10YR1.7/1）　粘性あり。粒子緻密・炭化物を若干含む。

0　(1：80)　2 m

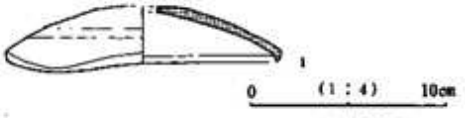
第9図　H 3 号住居址実測図



第Ⅰ層　灰黄褐色土（10YR5/2）
耕作土。下層に茶褐色の層が薄く堆積しており、水田の層と考えられる。
第Ⅱ層　黄橙色土（7.5YR7/8）
ローム層
第1層　にぶい黄褐色土（10YR5/4）
パミス・ローム粒子を多量に含む。
第2層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）
パミス・ロームブロック・黒色ブロックを多量に含む。
第3層　黒褐色土（10YR2/2）
粒子緻密。パミスを含む。
第4層　灰黄褐色土（10YR4/2）
パミス・ローム粒子を含む。ふかふかしている。

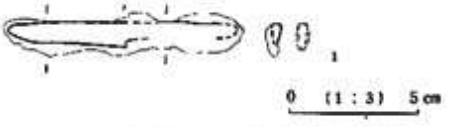
0　(1：80)　2 m

第10図　H 4 号住居址実測図



0　(1：4)　10cm

第11図　H 3 号住居址出土上器実測図



0　(1：3)　5 cm

第12図　H 3 号住居址出土鉄製品実測図

第2表　三貫畑遺跡出土土器観察表

挿図番号	器種	法量(cm)	成形及び器形の特徴	調整	出土住居址	備考
8－1	長胴甕	口径 (21.0) 器高 (9.2)	器肉が薄く、武蔵甕の口縁部。	内）口縁部ヨコナデ、胴部ナデ調整。 外）口縁部ヨコナデ、胴上部横位のヘラケズリ。	H－2	口縁部1/4残存。 回転実測。　覆土。 焼成良好。 色調　2.5YR6/3（にぶい橙色）
8－2	長胴甕	底径　4.8 器高 (5.2)	器肉が薄く、武蔵甕の底部	内）底部付近ナデ調整。 外）底面ヘラケズリ。胴下部縦位のヘラケズリ。	H－2	底部5/6残存。回転実測。 焼成良好。カマド内。 色調 内）7.5YR6/3(にぶい褐色) 外）10YR6/3(にぶい黄橙色)
8－3	小形甕	口径 (11.4) 頸部径 (9.6) 胴径 (12.3) 器高 (9.6)	器肉が薄く、小形武蔵甕。 口縁部「コ」の字状を呈す。	内）口縁部ヨコナデ、胴部ナデ調整。 外）口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。	H－2	口縁～胴下部1/4残存。回転実測。 焼成普通。No.6 色調 内）7.5YR6/4(にぶい橙色) 外）7.5YR6/2(灰褐色) 断）7.5YR6/3(にぶい褐色)
8－4	坏	口径 (15.8) 底径 (7.6) 器高　3.6	ロクロ成形。口辺部逆「ハ」の字状に大きく外傾する。	内）黒色研磨 外）口辺部ロクロヨコナデ。 底部ヘラケズリ。	H－2	約1/2残存。回転実測。覆土。 焼成普通。内面炭化物付着。 色調 外）5YR5/6(明赤褐色) 断）2.5YR6/2(灰黄色)
8－5	坏	口径 (14.4) 底径　6.4 器高　3.7	底部周辺をヘラケズリにより再調整している。 底部回転糸切り技法。	内）黒色研磨 外）口辺部ロクロヨコナデの後、底部周辺ヘラケズリにより再調整。	H－2	口縁1/4残存。底部完形。回転実測。 焼成良好。No.1 色調 外）5YR4/6(赤褐色) 断）5YR6/6(橙色)
8－6	大甕 須恵器		大甕の口縁部。	内）自然釉付着。ロクロヨコナデ。 外）ロクロヨコナデ。8本一組の櫛描波状文が観察される。	H－2	拓本。No.5。焼成良好。 色調 外）10BG4/1(暗青灰色) 断）7.5Y4/1(灰色)
8－7	蓋 須恵器	つまみ　2.7 口径 (15.5) 器高　3.8	宝珠つまみ、ロクロ成形。ゆがみが著しい。	内、外面ともロクロヨコナデ	H－2	1/2残存。回転実測。 焼成良好。No.4。 色調　5GY5/1(オリーブ灰色)
8－8	坏 須恵器	口径 (14.0) 底径 (3.4) 器高　3.7	口辺部真縁的に外傾する。 底部回転糸切り技法。	内）ロクロヨコナデ。 外）底部周辺ヘラケズリ。以外ロクロヨコナデ。	H－2	1/4残存。回転実測。 焼成良好。No.1。 色調　5Y7/1(灰白色)
8－9	坏 須恵器	口径 (13.6) 底径 (6.6) 器高　3.7	口辺部やや内弯気味に立ち上がる。	内、外面ともロクロヨコナデ。 外面底部と底部周辺ヘラケズリ。	H－2	3/4残存。完全実測。 焼成良好。No.3。 色調 内、外）5Y5/1(灰色) 断）5Y7/1(灰白色)
11－1	蓋 須恵器	口径 (14.0) 器高 (2.9)	つまみ部不明。ロクロ成形。	内、外面ともロクロヨコナデ。	H－3	1/2残存。回転実測。 焼成良好。No.3。 色調 内）5Y6/1(灰白色) 外）5Y4/1(灰色) 断）5Y4/2(暗灰黄色)

第3表　三貫畑遺跡住居址一覧表

遺構	検出位置	平面プラン及び規模	壁残高(cm)	付属施設	時期	備考
H1	か－15		0～14		不明	
H2	さ－7	東壁長326cm、西壁長312cm 南壁長316cm、北壁長336cm 東西長356cm、南北長356cmの隅丸方形 床面積11.8㎡ 主軸方向N－5°－W	13～21	北壁中央よりやや西寄りにカマド ピット6個	奈良時代後半から平安時代初頭	H3・4号住居址と重複関係にある
H3	さ・し－6・7	東壁長(268cm)、西壁長280cm 南壁長280cm、北壁長(302cm) 東西長304cm、南北長292cmの隅丸方形 床面積8.8㎡ 主軸方向N－8.5°－E	9～30	北壁中央にカマド ピット2個	奈良時代	H2号住居址と重複関係にある
H4	こ－7・8		7.5～11.5	ピット6個	弥生時代後期	H2号住居址と重複関係にある

第Ⅳ章　小　　結

今回、三貫畑遺跡で検出された住居址の構築・廃絶年代を推定するために、わずかな出土土器の分析を行った際、前々から感じていたことではあるが、土器編年は一体何を目的として行うのか強く疑問に思い、ここでは土器から得られる情報及びその限界を分析し、土器編年の方法について、多少観念的になることを覚悟の上で大胆に仮設設定を行い、実証については今後の研究としたい。

土器の研究を行う場合、土器が生活の道具として製作されたものであることは、一般の理解を得られるであろう。では、生活の道具としての土器は、種々の人間行動（生活）のどの分野に属する道具であるのかということが問題となってくる。

原明芳（1987）が「古代以降の遺跡の発掘調査をしていて一番目につく遺物は焼物であり、そのほとんどが食器である。そのため古代の遺物の研究といえば、食器の研究が主流といっても過言でない。しかし、その研究がどこまで食器本来の意味に迫る研究であったかは疑問が残る」と古代においては焼物≒土器のほとんどが食器、つまり食生活分野に属する道具であるといっている。

ここで、食器という概念が問題となる。食器の概念については、原と同様、宇野隆夫（1985）の見解に従い「食料を得て後、食事をすませるまでに用いた道具・施設のうち、倉庫や厨房のような遺構に属するものを除いた器物を食器と総称する」という規定を採用したい。

人間が「食べる」という行為を目的として、食物に加工・調理等を施すための道具の使用を開始したとき、動物の食事行動とは異なった人間特有の食文化が発生したのではないだろうか。石毛直道（1973）によると動物の場合は環境と口が直結しているのに対し、人間は狩猟・採集・漁猟・栽培・養殖などの手段で環境に働きかけて食料資源を得、この食物の原料にさまざまな加工を施すことによって、より食べやすくしたり、もともとは食べられないものを食べられるものに変化させ、できあがった食物を口にするとき、食事作法など食物に関する様々な振る舞い方が存在するとしている。食器はこのように食物の原料を様々に加工する調理具、原料を保存する貯蔵具、直接の食事行動と結びつく食膳具の使用方法によって３大別できるであろう。

また、石毛（1976）は旧石器時代の食事行動について食べ物を生で食べるか、直接火にかざして焼いて食べるのか基本的には二つの食物処理の方法しか人間は知らなかったといわれるのが普通であり、８～９千余年前に、中近東で粘土をこねて容器をつくり、それを焼いて素焼きの土器を発明した時から、食べ物を煮炊きすることが料理の主流となり始めたといっている。

この煮炊きをする調理具である煮炊具の変遷は食器の中でも最も基本的なものであるだけに、大きな食器様式区分をする際の指標として適切であると考える。

ここで、本来ならば現代までの煮炊具の変遷を追求してみたいが、後述するように古代と中世の間には食器様式に大きな変換が存在しそうであることから、時代を限定して記述したい。

現在の煮炊具を考えると金属製のものが主体であるが石毛（1976）によると「奈良時代になると、寺院や宮廷では鉄や銅でつくったナベ、カマが使用されたが、民衆はやはり素焼きの土器のナベ、カマを用いていた。鎌倉時代でも、金属製のナベ、カマは民衆にとっては貴重品であり、戦争のとき戦利品としてナベをぶんどったり、カマをぶちこわしたりしたのである。“月夜にカマをぬかれる”とは、月夜にカマを盗まれることから、大変不注意なことのたとえであるが、近世まではカマはだいじな品物であった」とし、近世まで金属製の煮炊具が大変貴重なものであったと述べている。

煮炊具は使用方法から材質として木は適さず、土か金属製のものに限られる。前述のことから近世まで煮炊具として土製のものも併用していたことが窺われ、土製つまり土器の煮炊具の変遷を考えると土器が発生する縄文時代の鉢と弥生・古墳・奈良・平安時代の甕の形態はその器形を見る限り同一の系譜上と考えられるのに対し、土鍋の発生と共にこの旧来の甕形態の煮炊具は消滅する。また、後述するように、原始・古代の食器の日常用器に占める土器は圧倒的であるのに対し、中世からは食器に占める土器の割合が著しく少なくなることなどから食器様式の一大転換期が古代と中世を区切る大きな指標になると考えられることと現在の発掘調査によって得られる資料の多くが原始・古代の時代の資料であることから、原始・古代の土器に焦点をあてて考えてみたい。

原始・古代における食器の日常用器に占める土器が主体であると推定するが、食器には土器以外にも自然の中にある草・葉・竹等の自然素材そのままのものの利用、及び木製・金属製・石製が考えられる。このうち金属製の食器であるが、前述したように金属製のナベ・カマが近世でも大変貴重なものであったように、原始・古代での金属製の日常食器を使用したことは考慮にいれなくてもいいと考えられ、自然物及び木製の食器については、発掘調査において特殊な状況下以外では残存しないため、食器の中に占める割合の実態を把握することは非常に難しい。しかし、木加工の技術の著しい発達は金属器の利用と木加工技術集団の木地師などが発生する古代からであり、貯蔵具については不明であるが、食膳具については、現在の発掘調査の成果において古代の住居址から出土する食膳具の土器の量的な多さには目を見張るものがある。しかし、中世になると土器の出土は極端に少なくなり食器として旧来の素焼きの伝統を引く焼き物は土鍋ぐらいとなってしまう。このようなことから、中世には木製の食膳具が多くなってきただろうと推測できるものの、原始・古代の食器の主体は土器であったと推測される。ただここで、石製の食器の取

扱いが問題となろうが、今後の研究課題として今回は触れないこととしたい。

以上のことから、土器は原始・古代を通じて容器としての食器の主体を占めていたと考えられ、原始・古代の土器の分析から得られる情報は、原始・古代の食生活と直接結びついた食器のあり方、つまり食器様式の情報と結論できる。土器編年はこの食器様式の時代性を抽出して時期区分したものにすぎず、タイムスケールの役割を果たす土器編年は細かな目盛りも必要であるが、土器から得られる情報が食器様式に関してのものと考えられる以上、原始・古代の食生活に関連していることは明かであり、その食文化にまで踏み込んだ時期区分がより大切なこととなる。

これから、食文化にまで踏み込んだ時期区分を試みたいと思うが、このように土器を食器として着目し、意識的に考え始めたのは今回が契機となったため、今までの知識を大まかに整理して記述を進める。

日本における土器の発現は、縄文時代からとされている。土器の発現以前は容器としての煮炊具が存在しないものと考えられ、食器様式変化の上で土器の発現は大変大きな画期となろう。縄文時代の土器を概観するに後期の一部と晩期を除くと、そのほとんどが深鉢と浅鉢形態であり、特殊なもの以外は日常食器は鉢形態に代表されるといえよう。このことは、食器の用途に明確な機能分化が行われておらず、食器としての土器に機能分化が必要でなかった食生活であったと考えられる。煮炊具・貯蔵具・食膳具の機能分化した土器が見られないことは、弥生時代の壺にあたる貯蔵具、古墳時代から平安時代の坏・椀にあたる食膳具がなかったことで、この鉢に代表される、仮に『鉢食器様式』の食文化では、一つの考えとして弥生時代の壺のような常に長期に、しかも大切に貯蔵しなければならない食物がなかったといえないだろうか。

次に森本六爾（1933）が「飾られた・美しき土器」と「飾られぬ・汚き土器」の二者を貯蔵形態と煮沸形態に対比させ原始農業の展開を論じた弥生時代の食器はまさに森本にいい尽くされたといえる。鉢食器様式の食文化の時代は、食器としての土器の機能が未分化であったが、この壺・甕の二者の存在は土器に機能分化が発生したことを意味するものであり、このことは食器としての土器に貯蔵専用の機能を持たせる必要が生じたのであり、常に長期にしかも大切に保存・貯蔵する食物が存在し始め、土器、つまり焼物をその利用目的の道具として採用した点に大きな特徴がある。この時代の名称は壺・甕食器様式の食文化とするのが妥当と考えられるが、甕は次の時代に継続して存在することと、壺のもつ美しさとバラエティーに富む形態から仮に『壺食器様式』の食文化の時代としたい。

須恵器の受容は、土器製作技術の上で画期的なことであった。それは単に高温で焼かれ品質の良い焼き物というだけにとどまらず、ロクロの導入、専業集団の発生から土器の大量生産が可能になったことを意味する。この須恵器の登場は、また、土器の食器様式のうえで一大変画がおこる。それは坏・椀形態の食膳具が日常器化したことである。このことは、共食用食器から個人用

食器が日常用器として使用される食生活習慣が確立したことを意味し、土器製作技術の革新・土器の食膳具食器の確立という大きな画期として、この坏・椀形態の受容期が原始的食器様式の食文化と古代的食器様式の食文化を区別する指標となるのではないかと考える。この坏・椀形態が代表する古墳時代中期から平安時代までを仮に『坏・椀食器様式』の食文化の時代としたい。

以上のように原始・古代の食器様式の変遷を概観したわけであるが、通有する時代区分において考えると、原始においては『土器使用開始前の食器様式』、『鉢食器様式』、『壺食器様式』の3つの大きな時代があり、古代は『土器を主体とした坏・椀食器様式』の時代といえる。しかし、食器様式のみから時代を考える時『土器使用開始前の食器様式』と『鉢食器様式』の間には、原始的食器様式と古代的食器様式の差異より大きな食文化の違いが見いだされるのではないだろうか。

食器と食物・食事行動は密接な関係にあり、それは人々の精神領域にまで深く結びつくものと予想でき、考古学が研究する最終目的はこの精神領域の研究であり、そのための手段としての土器編年は、土器の持つ情報とその限界を明らかにし、その他の遺跡・遺構・遺物との関連と有機的・総合的な統合から当時の人々の精神構造を解明していく方向を今後模索していく必要があると感じる。

引用参考文献

原　明芳（1987）「信濃における食器の系譜－古代から中世へ－」『文化財信濃第14巻第３号』

原　明芳（1987）「松本平における平安時代の食膳具－変化とその背景の予察－」『信濃第39巻４号』

宇野隆夫（1985）「古代食器の変化と特質」『日本史研究第280号』日本史研究会

高村博文（1989）「佐久地方の古代土器様相について－坏・埦の変化を中心として－」『佐久考古通信№47・48号』佐久考古学会

渡辺　誠（1983）『縄文時代の知識』東京美術

石毛直道（1976）『食卓の文化誌』文芸春秋

石毛直道編（1973）『世界の食事文化』ドメス出版

森本六爾（1941）『日本農耕文化の起源』小宮山書店

1　三貫畑遺跡付近の航空写真

1　三貫畑遺跡近景（西方より）

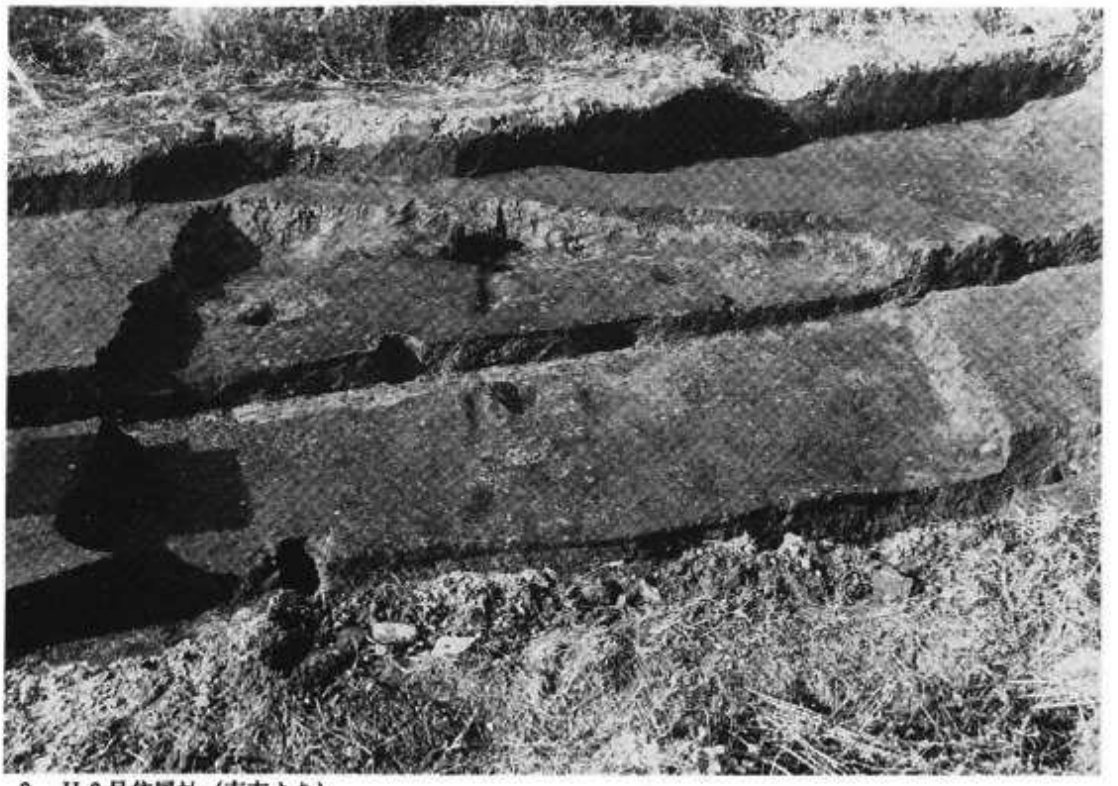
2　三貫畑遺跡近景（東方より）

1　D地区全景（西方より）

2　H１号住居址（南方より）

図版 四

1　H１号住居址（西方より）



2　H２号住居址（南方より）

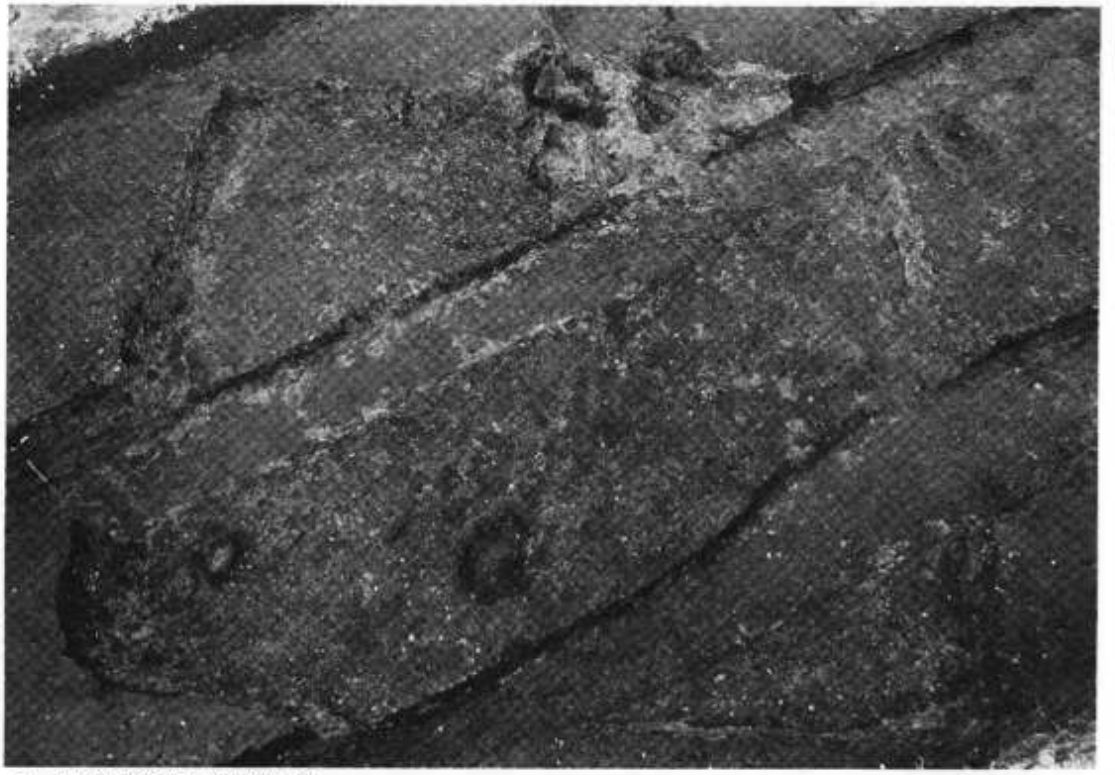
1　H２号住居址

2　H２号住居址カマド

3　H３号住居址カマド

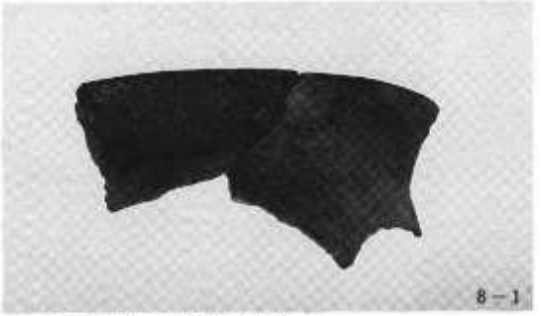
4　H３号住居址遺物出土状況

5　調査団スナップ



1　H 3 号住居址（南方から）

2　H 4 号住居址（南方から）



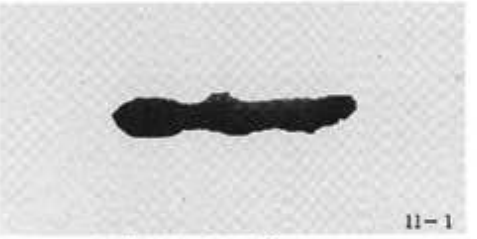
1　H 2 号住居址出土遺物

2　H 2 号住居址出土遺物

3　H 2 号住居址出土遺物

4　H 2 号住居址出土遺物

5　H 2 号住居址出土遺物



6　H 3 号住居址出土遺物

7　H 3 号住居址出土遺物×線写真

長野県佐久市
佐久市埋蔵文化財調査報告書第７集
三　貫　畑
平成４年３月
編集・発行　佐久市教育委員会
印　　刷　株式会社　櫟〈いちい〉